

2025年度 第2回生物多様性の保全に向けたネットワーク会議 議事要旨

日時：2025年12月20日（土）13:30～16:00

会場：グラングリーン大阪 JamBase 7階セミナールーム

オンライン（Teams ウェビナー）・現地とのハイブリッド開催

参加者：61名（内オンライン12名）

内容

1 会議の趣旨・説明

平井 規央氏（大阪公立大学大学院農学研究科 緑地環境科学専攻 教授）

大阪市生物多様性の保全に向けたネットワーク会議は、大阪市生物多様性地域戦略に基づき、毎回テーマを設定して専門家講演と参加者間の意見交換を行う場として継続してきた。

2025年度は「都市における緑の役割とは」を統一テーマとし、第1回では以下の講演を通じて、都市と生物多様性をめぐる基礎整理を行った旨が共有された。

石井 亘氏：生物多様性の恵み（4つの生態系サービス）と、生物多様性を脅かす4つの危機

加我 宏之氏：都市の緑を一次～三次自然緑地で捉える視点、緑の変遷と役割、エコロジカルネットワーク

花田 真理子氏：生物多様性国家戦略（ネイチャーポジティブ）と、OECM・自然共生サイト、30by30の関係／大阪市内の認定事例

第2回は、自然共生サイトに登録された積水ハウス(株)の「新・里山」の取組を学び、現地訪問を通じて理解を深めるとともに、第3回に予定する動画制作（発信）に向けた検討を進めることが目的として示された。

2 基調講演：「庭から始める都市の生物多様性保全の取り組み～新・里山より～」

八木 隆史氏（積水ハウス株式会社 ESG 経営推進本部環境推進部環境マネジメント室）

2-1. 生物多様性危機と国際枠組（ネイチャーポジティブ）

生物多様性の傾向を測る指標として「生きている地球指数」が紹介され、1970～2020年の50年間で73%減少しているというデータを踏まえ、危機の深刻さが共有された。

2030年ネイチャーポジティブ（2020年を基準に2030年までに損失を反転させる）に向け、COP15で採択された「昆明・モンリオール生物多様性枠組」が示す方向性が紹介された。

同枠組の中には、都市部における緑地・親水空間の面積、質、アクセス便益の増加

生物多様性に配慮した都市計画の確保

事業者（特に大企業・金融機関等）による、生物多様性リスク／依存／影響の評価・開示、持続可能な消費のための情報提供が含まれ、企業にとっても生物多様性が主要な経営課題であることが確認された。

2-2. 積水ハウスの環境方針と「5本の樹」計画

企業ビジョンとして『『わが家』を世界一幸せな場所にする』を掲げ、環境問題の解決が安全・安心や企業の社会的必要性に直結するとの考えの下、環境取組を推進していることが示された。

課題領域として「生物多様性」「気候変動」「資源循環」を位置づけ、ZEH・ZEB推進、脱炭素化、ゼロエミッション等と並行して取組を進めてきた。

生物多様性（種・生態系・遺伝子の多様性）を踏まえ、造園事業のブランドコンセプトとして「5本の樹」計画を紹介。

「3本は鳥のために、2本は蝶のために」という考え方で、地域の在来樹種を中心に植栽し、住宅の庭と里山の緑をネットワークとしてつなぐ。

里山は人が適切に関わることで生物多様性が豊かになり得るという前提が共有された。

在来種の意義の例として、外来樹木（例：ヒマラヤシダー）は利用する生き物が少ない一方、在来種（例：クヌギ）は多くの生き物に利用されるという知見が提示された。

2-3. 実装の仕組み（樹種選定・流通・理解促進）

「5本の樹」計画では、

全国を5地域に分類

気候に適した在来樹種を選定

鳥や蝶などが利用する樹種かを確認

全国で288種の選定樹種を整理 といった運用を行っている。

お客様理解を得るためのツール整備（居住後のお役立ちツール等）や、在来樹種を安定確保するための流通経路整備、生産者・造園業者向け勉強会など、供給側の体制づくりも推進している。

これまでに顧客の庭に提供した樹木は累計で2,069万本に達していることが報告された。

2-4. 効果検証（生物多様性回復効果の数値化）

分譲地の庭での生き物調査により、鳥類・昆虫類の増加が確認された。

さらに、個別現地調査（マイクロ）にとどまらず、

生物多様性ビッグデータ

「5本の樹」計画の実績データを組み合わせ、世界初の生物多様性回復効果の数値化検証に成功した旨が紹介された。

主要な分析結果として、

計画実施により住宅地の樹種数を大幅に増やせる（樹種数を約10倍にできる）

生き物を住宅地に呼び込む効果（鳥：約2倍、蝶：約5倍）が示され、科学的エビデンスとして計画の有効性が提示された。

2-5. ウェルビーイングとの関係

在来種中心の植栽と身近な生きものとのふれあいが、ウェルビーイングや環境配慮意識と関係する可能性について、総合的な検証を進めていることが共有された。

検証の方向性として、うつ症状の軽減や環境配慮意識の高まり等の効果が示唆された。

2-6. 「新・里山」の概要（都市の中の里山的空間）

2006年7月、大阪（新梅田シティ）に約8,000㎡の敷地で、約200種・500本以上を植栽し「新・里山」をオープン。

「新・里山」は、環境省：地域生物多様性増進法に基づく「自然共生サイト」認定

国土交通省：TSUNAG（優良緑地確保計画認定制度）認定を受けている。

施設・要素として、棚田（330㎡）、畑（300㎡）、蝶の庭、ビオトープ、吸蜜植物・食草植物、堆肥置き場、エコスタック等を整備し、管理している。

生物相の例として、年間30～40種類の野鳥が飛来し、蝶・昆虫も50種以上が確認されている。

教育支援活動やオフィスワーカーへの開放等、多様な利用を通じて仲間を増やし、都市の生物多様性を豊かにする活動を進めている。

3 動画制作の説明：加藤（事務局）

参加者は4グループに分かれ、動画制作のテーマを「身近なところにある自然の魅力を発信しよう」と設定。

扱う観点として、以下の4テーマを提示。

ひとつひとつの生き物の暮らし

生き物どうしのつながり

人と自然との関わり

地球環境との関わり

さらに、各班は「人の視点から／生き物の視点から／地球環境の視点」の3視点から焦点を定め、動画制作素材（動画・静止画等）を収集することとなった。

4. グループディスカッション報告（当日発表）

4-1. 進行（イントロ）

加藤（事務局）から、撮影素材を踏まえた共有パートに移行する旨が案内され、花田氏がフィールドワーク結果の共有進行を担った。

4-2. 各グループ報告（撮影対象・着眼点）

1班（平井氏）：「石のオブジェ」と多様な視点

撮影した写真を全員で見て感想共有を実施。

虫が少ないと感じた参加者は木の実、花、葉等を撮影。

予想以上に「石（オブジェ）」を撮影した人が多く、歩行中には目立たなかった石が、草に紛れて意味深に見える等の気づきが共有された。

「ゴミ」を撮影した参加者がいたことから、都市空間としての課題（不法投棄等）にも視点が向けられた。生き物の目線（低い位置）から草むらを撮るなど、「生き物視点」の表現が印象的であった。

石の由来について質疑があり、八木氏から「新・里山以前のデザイン要素を活用している」旨の説明があった。

2班（平松氏）：里山コンセプトと「見せる管理」

主な話題は「石（オブジェ）」で、意味を深読みしながら議論。

都市の中心部で里山環境を復元する試み自体がチャレンジングであり、デザイン要素が人と自然の共生表現に寄与しているのではないかという整理。

落ち葉や藁を系の外に出さず、内部循環させる考え方（資源循環）に注目。

通常バックヤードで行われがちな作業を、あえて「見せる」形で実施し、看板で説明もすることで、取組の理解促進につながっている点が評価された。

3班（相子氏）：3つの視点整理と「生き物の集まる場所」

参加者それぞれが印象に残った写真を提示し、その意味を説明する形式で共有。

3視点（人／生き物／地球環境）で分類すると、単一結論に収束というより、多面的に成立する見方を確認。

ビルの合間にある緑が、人の目を和ませる機能を持つ点。

生き物が寄り付く条件を整えることで「集まる場所」を形成している点。

周辺の虫・鳥が、この場所の存在によって引き寄せられるという意味で、都市における魅力的な拠点になっているという整理。

4班（原口氏）：景観の裏側にある「人の関わり」と管理のあり方

各メンバーの撮影テーマを共有。

「木を植えたことによって生まれたつながり」

「花に虫が集まる様子」

「エリアごとの樹木配置」

周縁部と中心（コア）での植え分け等、配置の意図に着目。

ビル群の中に里山景観が成立していること自体が独特であり、「都市と自然の調和」が撮影テーマになり得ると整理。

課題・疑問として「バードストライク対策」の問いが提示。

また、維持管理は所有者だけではなく多様な人々が関与しているのではないかという仮説が提示され、「人

の関わり」自体が景観の魅力要素である一方、映像化は難しいため追加ヒアリングしたいという意見が出た。

5. 深掘り議論（花田氏進行）：バードストライクと維持管理

5-1. バードストライク対策

花田氏より、バードストライクへの追加手法について問いかけ。

参加者から、

ガラス面にドットや格子状の線（シール）を貼る

鳥が視認できるようになり衝突が減る

空調効率面でも利点がある場合がある との情報共有があった。

花田氏から、積水ハウスでは年間 10～15 件ほど衝突事故がある一方、衝突した鳥を大阪市立自然史博物館へ持ち込み標本化するなど、死を無駄にしない対応を行っている旨が共有された。

5-2. 維持管理体制（常駐管理・安全配慮）

多様な関与が必要な都市緑地の管理について議論。

八木氏より、管理は「ガーデンラボ」に委託し、常駐体制によって日々の変化を確認できることが説明された。

虫の発生などを早期発見し、必要に応じて手作業で枝葉を切る等、拡大抑制が可能。

定期作業と日々作業を分けて運用している。

花田氏から、安全性の観点（倒木リスク等）も重要であり、キノコ（菌）発生などを早期に確認し、木の寿命を判断して早めに切るといった配慮が行われている点が補足された。

自由に人が出入りできる都市中心部の現場で、人との共生を成立させる知恵が実装されている点が評価された。

6. 総括・閉会

平井氏より、御堂筋の人混みからビルの谷間に入ると意外な里山景観が広がること、様々な工夫が感じられたことが述べられた。

当日の季節感として、ツワブキ、イソギク、フジバカマ、サザンカ等の開花が観察された。

昆虫の話題として、ハエが多い点に触れ、ヒロズキンバエ、オオクロバエ、トリハネバエ等の例から季節・移動性に関する知見が共有され、都市の中でも生物のダイナミズムが感じられるという所感が述べられた。

これらの観察・気づきが、「新・里山」の工夫を伝える良い動画（第 3 回発表用）につながることを期待された。

加藤（事務局）より閉会挨拶。大学生は Google ドライブに写真を集約し、第 3 回での発表に向けて準備を進めることとなった。